

# 我、 鉄路を拓かん

第五回

梶よう子

## 第五章 お雇い外国人

一

軒のきから雨したたが滴り落ちる音がしていた。

弥市やいちは、お蝶ちよの家ちやうでふた晩過こしていった。

もう九ツ（正午）近いというのに、夜具やぐにうつ伏せになって煙草タバコを服のんでいた。煙けむが、梁はりが剥むき出しの屋根裏むねに上がっていくのをぼうつと眺める。

昨日けふから八ツ山やつやまの切り割りに掛かるはずだったが、生憎あいにく、雨が續ついていた。十月じゅうがつから高輪たかなわ品川間しながわの築堤ちくていに取り掛かるまで、五ヶ月ごがつご近くあるとはいえ、決して悠長ゆうちやうにはしてられない。

雨はもう三日、降り続いていた。工事こうじの割付役わりつけやくの大竹宗保おおたけむねやすから、

順延が知らされ、ようやく明日、あかつき 暁七ツ（午前四時頃）、品川八ツ山に集まることになった。多少の雨が残っていても開始する。雨を  
含んだ山肌やまはだから土を掘り出すのはいささか危険が伴うが、弥市の  
常雇いの者たちと児嶋屋こじまやからの黒鋏くろくわの半分を回せば安心して任せ  
られる。黒鋏の残りは、浚渫しゅんせつに——さて、おれはどちらで差配さばいすべ  
さか。

請負人の顔合わせの宴うたげの数日後、児嶋屋と世話人、黒鋏を束ねる  
親方の源三郎、息子の松之助と、安達屋久治郎の家で会った。源三  
郎父子は日に焼けた顔と肌をして、屈強なその身体からだつきは羽織はおりの上  
からも見て取れた。

黒鋏たちは、東京近郊だけでなく下総しもとうさ、常陸ひたち、上野こうずけといつたところからやって来ている。普段は百姓仕事をしている者も多いが、川の護岸、埋め立て、浚渫など大きな工事があれば、在所を留守にして、どこへなりとも出向いていく。

源三郎父子は、蒸気車がどういうものかさえ知らなかった。しかし弥市が絵入りの『西洋事情』を持参して説明し、これは国の大事業であること、鉄路を敷く堤つみは、海に築くこと、その長さは約二十四町ちようちょう（約二・六キロメートル）にも亘ると告げると、

「こんな大仕事に携たずさわれるとは。末代までの自慢になりまさあ」と源三郎は興奮を隠さずいった。

二日前には、相模屋さがみやと山中政次郎やまうちまさじろうと重太郎じゅうたろうに呼び出され、堤の高さは海底より一丈二尺じちゆう じやく（約三・六メートル）、幅はおおよそ三間半けん（約六・四メートル）だと伝えられた。

「もう絵図面もあるんでしようね？」

「そいつはまだだ。モレルつてお雇い外国人がおおまかな絵図面を引いてるらしいが、横浜よこはまの築堤を先にやっっているって話だ。こっちは、いまだ鐵路が掛かる土地の住人や百姓の立ち退のきが済んでねえということだな。品川あたりじゃ騒さわぎになってるよ。貸家の大家おおやもいるし、ひとり頭の金もいろいろだが、安くて二両だ。商売している奴やつだと、おいそれと引越しも出来めえよ」

重太郎がにやにやしながらいった。

「品川かながわや神奈川だいはの台場を造ったお歴々れきれきなんだろう？ 築堤なんて土を盛るだけのもんなんだ、絵図面なしでも出来るんじゃないかと思つたが、そうじゃないんだな」

ふざけるな、と喉のどから出かかったが飲み込んだ。ただ土を盛るだけだと？ 蒸氣車が走る堤が、それも海の上となれば、どれだけ頑丈じようちゆうに造るのかわからねえ。実際に鐵路敷設ふせつに携たづなわった異人に教しえを請こわないとならないこともあるはずだ。こいつは、本気で鐵路を敷く気があるのか、どれだけ甘いのだ、と怒鳴どなりつけてやりたかったが、政次郎の手前、ぐつと堪たえた。

弥市の顔色を読んだのか、掛かりのことだが、と政次郎が金の話を振ってきた。

「一旦、いったん立て替えてもらうことにはなる。下請け、孫請けも多くなるだろうから足りねえときにはいつてくれ。出来るだけ早めに用意する」

「では、まなづるむら真鶴村六ヶ村にすでに石の発注をしております。請け負ってくれた青木あおきという者に千両の前金を渡しております」

「おい、うちに黙って勝手にことを進めたのか？」

重太郎からとがめるような口調くちようが飛んできた。弥市は、ふっと息を吐く。

「一尺（約三十センチメートル）四方、長さ三尺の石を四万本切り出すのに、どれほどの期間がかかると思っていますか？ その運搬もある。こちらに運ぶ石船いしふねも処ところの者に出してもらうことになっております。もう四月も末だ。動かなきゃ間に合いませんよ」

うつと、重太郎が言葉に詰まる。

「とんでもねえ数の石なんで、この一件はおだわらはんちじ小田原藩知事にも通しております。なんなら、確かめていただいても結構ですがね」

かっとなを上げた重太郎が身を乗り出したが、政次郎が制した。重太郎がそっぽを向く。なんともガキっぽいお人だ。どっちが足手まといだ。

「石のことは承知した。で、そのほかの段取りも出来ているのかえ？」

政次郎が煙管キセルを吸って、ふうと煙を吐く。

「土は、当初の予定通り御殿山ごてんざん、八ツ山のものを使います。とはいえ、近々海の浚ほいいをしまして、底がどういいう加減かげんか見ねえと」

「ほう」

「品川台場もそうでしたが、積もった砂をすっかりどけて、海底の地盤じばんがどれだけ堅いか確かめなきゃいけません。品川ん時は、台場が沈むのを防ぐため、海の底に杭くいを打って、十露盤木そろばんぎを置きましたんでね。で、浚漑ほいした土砂どしやを運ぶのにも人夫にんぶが要ります。そちらさまからはどれほど出せますかね？」

「ざっと、千というところだな」と、政次郎が応える。

「ありがとうございます。人夫さえ出していただけりや十分です」  
弥市が頭を下げると、鼻しわに皺しわを寄せた重太郎の舌打ちしたうが聞こえた。

あの折の重太郎の悔くやしそうな様子を思い出して、弥市はくすりと笑う。

「弥市さん、思い出し笑いなんかして、気持ち悪い」

お蝶おてつが鏡台の前で髪を整えながらいった。

「なあ、お蝶。鰻うなぎが食いてえな。外へ行くか」

「昼から鰻ですか？　でも雨が強いから……」

夜着の襟を大きく抜いて、お蝶は、後毛を撫であげる。白い頸と尻の丸みについ眼がいく。

「おめえ、この頃、肉付きがよくなつたんじゃねえか？」

「あたしも年増ですよ。娘時分とは違います」

弥市はそろりと指を伸ばして、尻を突く。

きやつ、と声を上げたお蝶が腰を浮かせ、振り向きざま弥市の手を叩いた。

「そんなに嫌がることあねえだろう。ゆんべは、いい声で鳴いていたくせによ」

「もう、知らない」

お蝶が唇を尖らせた。

ははは、と弥市は笑って、身を起こしたが、「ああ、痛てて」と、腰に手を当てる。

「あらあら、無理をなさつたんじゃ」と悪戯っぽい視線を向けてお蝶が、くすくす笑う。

「おきやあがれ」

それでもお蝶は笑い続けている。

「なにが、そんなにおかしいんだよ」

「だって、弥市さんが昔に戻つたみたいで。嬉しいんだもの。蒸気

車の話を請け負ってから、すごく活き活きしてるから」

「そんなに違うかえ？」

うん、とお蝶が頷いた。

「まあよ、おれが請け負う土工ってのは、大工や石工、左官、屋根葺きといった職人とは違う。百姓の夫役や、人宿で募る日傭取りの人夫で成り立ってるもんだ。それだけ格が下がるんだ。おめえもわかっていと思うが、でかい屋敷を見れば、当然上物を褒める。その下にある土台なんざ気にもとめねえだろう？」

「ええ」

「築地のホテルもそうだ。ありや、立派な建物だ。見物人が押し寄せるほどのな。でも、あのホテルの下がどうなっているのか誰も知らねえ。土を掘り下げて、また土を入れて、杭を打って、石を入れて、また土だ。土台を固めているなんてのは知りもしねえし、興味も惹かれねえ。おれたちの仕事は人の目に触れることはねえが、あれだけの建物を支える土台を造ったことに、誇りを持てるんだよ。まあ、表舞台には立たねえ、まさに縁の下の力持ちってやつだな」

見ると、お蝶が眉間に皺を寄せていた。

「こりゃ、つまんねえ話をしたな。さ、鰻だ、鰻を食いに行くぞ。

早く支度しな」

弥市が急かす。しかし、お蝶は考え込むような顔をしている。

「悪かったよ、仕事のことなんざ、おめえにはかかわりねえことだもんなあ」

すると、お蝶が首を横に振り、「そうじゃないの」といった。訝いぶかしむ弥市のもとに這はうようにして近寄ってくると真剣まなざな眼差しを向けた。

「弥市さんは人から褒められたいから仕事しているの？」

「そんなことはねえけどな」

「でもね、あたし、思ったの。海の上に造る堤は、弥市さんの仕事そのものじゃないかって。だって、堤の上に屋敷なんか建てないんだもの。鉄路を置くだけでしょ。弥市さんたちが造った堤はそのまんま人の眼に触れるってことよ。ああ、すごいなあって」

弥市は面食めんくらった。そんなこと、思ってもみなかった。

お蝶が小首こくびを傾かしげ、弥市の言葉を待つように窺うかがってくる。

「そ、そうか。そうだな。その通りだよ、お蝶。それをいったら、

ご一新前に造った台場もそうかもしれねえがなあ」

「それは違う」

すかさずお蝶が返してきた。

「台場は大砲を置くだけの場所。でも蒸気車は皆の暮らしを良くするものなんですよ。それに、日本一長い海の上の堤に敷かれる鉄路はずっと繋つながって、この国中に延びて行くんだもの。ただ海に据すえ



られただけの台場とは違う。多分、蒸気車が通った東京中の、日本中の人が見物にくるかもしれない。その大勢の人たちが、弥市さんの造った堤を見るの。なんだかあたしも鼻が高い」

お蝶が顔を弥市に近づける。

「ね。そうでしょ？」

弥市は、黙ってお蝶を引き寄せた。

「苦しいってば。ほらあ鰻食べに行くんでしよう」

お蝶はするりと身を引くと、襟を引き上げ、立ち上がった。

と、表で訪いおとなを入れる声でした。

「大家さんかしら？」

お蝶は訝りながら、小袖こそでを羽織ねまって寝間ねまを出て行ったが、男の聲が聞こえ、すぐに戻ってきた。

「勝さんかつという方が訪ねていらしたけど」

弥市は思いもよらぬ客に、口をぽかんと開けた。

弥市は急いで身支度を整える。泥で汚れた足ゆずを濯いだ勝が座敷に上がってくるなりいった。

「なんて面つらだよ。おいらはまだ幽霊ゆうれいじゃねえよう。足もあるぜ、平ひら野屋のや」

目尻の皺しじわと白髪しらがが増えたが、優やさしい顔つきは変わっていなかった。

いやいや、歳は変わらねえのだ。おれも同じか。

はっとして弥市は平伏した。

「ご無沙汰しております。ご活躍は風の噂で耳にしております」

「よせやい。堅っ苦しいのはなしだ。おいらはしばらく駿府にこもっていたが、新政府に引つ張り出されてな。けど、どうにも仕官は性に合わねえのか、近々やめることにした」

は？ と弥市は眼を丸くした。

「まあ、おいらが新政府にすることで、苦々しく思う旧幕府の者もいなくはねえ。けど埋もれた奴らを引き上げてやるって役割がまだ残されているがな」

「此度の鉄路の敷設には、元作事方のお方がかかわっていらっしやいます」

「そりや、いいこった。新政府の役人より、江戸のことを知っているからな。重宝されるだろうぜ」

ところで、と勝がにやついた。

「おめえの女房は大した女だな」

なんのことかと、弥市は勝をまじまじ見た。

「おいらも女のことじゃ、女房どのには頭が上がらねえんだけどな。けど、おめえの家を訪ねたら、なんだか慌てふためく手代の隣にいたおめえの女房が、宇田川町の店の近くに世話をしている女子がい

るからそこだろうと教えてくれたよ」

げつ、と弥市は仰け反った。気づかれているとは思ったが、まさか勝にこうまではつきり告げられるとは思わなかった。

「怒っちゃいけねえよ。知っていても知らん振りが出来る女はそうはいねえ。いえなかった手代の気持ちを探して、女房が代わりにいったんだろしな。それにこうもいったよ。居所さえわかっただけ、なんの心配もありやしません、たまには平野屋の看板を下ろしてゆつくりしたいこともあるでしょうからつてな、ははは」

女はなんでもお見通しよ、と勝は楽しそうにいった。

「そりゃあ、そうだよな。女がいなきや、男も生まれてこないんだ」

「まあ、そうですな」

「あの、勝さまのおもたせで」

と、お蝶が茶と菓子のを盆に載せてきた。狭い家だ。勝の言葉は聞こえていたろうが、お蝶は顔色ひとつ変えていない。こいつもたいした女子だ。

「おれの好物の壺屋つぼやの最中もなかだ。壺屋はな、ご一新後に暖簾のれんを下ろすといひ出しやがった。將軍家のお膝元ひざもとで商売をしていたから新政府のためには売れねえと。でもよ、市民のために残ってくれと、頼んだ。おれが食いたい時に食べねえのも困るからな。ほれ、あんたも食いな、うめえぜ」

勝は、お蝶に最中を差し出した。ありがとうございます、とお蝶は笑みを浮かべて、受け取ると、隣室へ退いた。

最中をひと口かじる。餡の甘さがじわりと口中に広がった。

「聞いたぜ、鉄路は海の上を通すんだってな。まったく兵部省も頭が固い」

「伊藤侯が敷設反対の者に襲われたってのは知っておられますか？ 襲撃を企てたのは海軍兵士だったと、後から聞きました。」

伊藤侯は、夜襲を恐れて、この頃、寝不足だって噂です」

勝が最中を口にして、眉根を寄せた。

「いまだにそうした馬鹿者がいるんだな。伊藤ひとりを襲ったところで、その後ろにはもう数十、数百の人間がかかっていることをわかっていねえ。動き出したもんは止めるほうが難しい。維新回天を成し遂げた者らなら、わかっているだろうに」

勝が首を横に振る。

「どんな妨害があろうとも、おれは必ず鉄路を通します。だいたい、すでに海の上つてのが難題ですからねえ。けど、負けちゃいられませんか。勝さまから、蒸気車の話を聞いてから、夢にまで見たんですから。それがまことになったんだ。勝さまには感謝しきれねえ」

「礼なんざいらねえよ。おめえがそこまで蒸気車に惹かれたとはなあ。まあ、おれは、そのきっかけを作っただけだ。男つてのはどう

してこう、でかい物に惹かれるのかね。船もそうだし、蒸気車もそうだ。海や空、広い大地を見ても、心が騒ぐ。大きな物を見て、自分のちっぽけさを思い知らされるからこそ、憧れるのかもなあ」

「そうかもしれません。手強ていぢそうな物が好きなんです。立ち向かいたいとか、船や蒸気車を動かしてみたいとか」

「だったら、築堤もでかいじゃねえか？ しかも海の上となりや、土工請負人の腕が鳴ってしようがねえってな、ははは。それで、堤はどう造るんだえ？ やはり台場と同じになるのか？」

「へい。お雇い外国人が図面を引くそうですが、おれたちの国にはおれたちのやり方もありますんで、そのあたりは意地を張りてえ」  
「おう、その意気だ。嬉しいねえ」

勝はいきなり張り切り切り出した。

長さは、高さは？ と矢継ぎ早やに弥市やを質ただしてくる。

「二十四町か。これまでの台場を繋ぎ合わせても足りねえ。大層な代物しろものだな。それだけにやりがいもあるうよ」

「おっしやる通りで」

「台場なんぞ、平時ならいらねえものだ。乱暴にいえば、やがて朽ちても誰からも文句もんくは出ねえ。いや、兵部省が怒るかな。まあ、そんな奴らはほっとけばいいが、鉄路は別だ。毎日蒸気車が走る、それがこの先ずつと続く。決して崩れくずちゃいけないからなあ。人が乗

ってる。蒸気車は人の命を乗せて走る。築堤には波も押し寄せる。  
こいつは難儀だなあ」

「まあ、高輪あたりは遠浅だつてことがまだいいですがね。波もさ  
ほど高くはありませんから」

そうかそうか、と勝は頷く。

しばし、昔話に花を咲かせた。江戸開城に導いた薩摩の西郷隆盛  
との会合など、聞きたいことが山ほどあった。神奈川台場や松山侯  
の話まで出た。

雨音が次第に静かになってきた。障子を通しても明るくなってい  
るのがわかる。

一刻（約二時間）ほども経つたろうか。

ずっと勝が腰を上げた。

「懐かしくて、つい長居をしちまった。邪魔したな」  
引き止める間もなく、勝がすたすと出て行く。

三和土で下駄に足を入れながら、

「なあ、平野屋。新しい時代だ、近代化だと新政府は威勢がいいこ  
とこの上ねえ。ただなあ、いくら政府が良かれと思っても、驕  
つちやいけねえ。国のため万民のためと口触りのいいことを政府が  
吐かしても、鵜呑みにするなよ。そこんところは、ご一新を潜つて  
きたおめえたちは身にしみているはずだ。神奈川の台場の時も話し

たっけな。国の仕事は大きな金が動く。携わる奴らの利は大きい。けど、その陰で泣く者も出てくる。弱い者いじめになっちゃいけないよ。いいかえ、人には感情があるからよ。無理を通せば、ますます意固地になる。忘れるな」

「へい。肝に銘じます」

勝が背を向けた。

「とはいえ、おめえが通す鉄路を走る蒸気車に早く乗りてえもんだ。アメリカ  
亜米利加じゃ、乗れなかったからな。楽しみに待ってるよ」

障子戸を開け、空を仰ぎ見る。

「お、薄日が射してるぜ。明日は晴れそうだな」

弥市は、表に出て、勝の姿が見えなくなるまで頭を下げた。

翌日、白々と明け始めた品川の八ツ山の麓に、人夫たちが勢揃いした。

山の切り割りは千名を見込み、弥市と安達屋久治郎、森田屋藤助は、黒鍬百五十名を合わせて、五百名を集め、重太郎もまた五百ほどの人夫を引き連れ、姿を見せた。

雨が降る前、吉日を選んで、すでに地鎮の儀を執り行った。祝詞の後、鉄道掛総理の上野景範、副総理の平井義十郎、そして相模屋の政次郎が、鍬入れをする。鍬入れは、鎌、鍬、鋤の順に、小さ

く盛った土に刃やいばを入れる真似まねをするものだ。

「えいつえいつえいつ」

盛り土に鋤しよさを入れる所作しよさをする政次郎の野太のぶとい声が響く。

地鎮うぶすながみの儀は、産土神うぶすながみにこの地を使用する許可を得、作事ふしん、普請ふしんの無事を祈るために執り行とう。この儀に参列する度、思う。

土工は、大地と海、川、そして大地はくぐが育んだ樹木や石との格闘かくとうなのだ。そして大地はときに牙きはを剥く。人は、大地に間借りしているだけの存在なのだということを思い知らされる。

政次郎が、

「皆の衆、雨で延びたのも、神さんおぼの思おぼし召めしだ。今日からちやっちやと働いてもらうぜ。今日が初日だ。夕餉ゆうげには酒をつけてやるかな。その前に、まずは景気けいきづけだ」

あたりに響き渡るような声でいった。

菰樽こもたるの酒が次々と開けられ、千名の人夫たちに振る舞われた。

高輪の海が昇る朝日に眩まぶしいほど煌きらめいていた。

完成した築堤の上で、同じ朝日を拝みてえ。

いよいよだ。弥市の胸が高鳴る。隣に並ぶ久治郎、森田屋の顔も高揚こうようしていた。

千名の人夫たちが、地鳴りじなのような声を上げる。

政次郎が八ツ山を後にする。



工事割付役の大竹とともに、見送る。

各々が鍬、鋤、まんのう鍬などの道具を手に、大竹の号令で、一斉に動きだした。

それぞれの持ち場を決めるため、丁張りをする。黒鍬衆が、掛矢で杭を打つ音が響く。

人夫たちの威勢のいい声が飛び交う。

樹木を倒し、草を刈り、鋤や鍬を使い、土を掘る。

陽射しが次第に強くなってくる。半刻（約一時間）もしないうちに人夫たちは腹掛けと下帯姿になって、鍬を振るう。

やはり三日続いた雨のせい、足許は思った以上に泥濘み、あちらこちらにわたずみが出来ていた。うっかりすると足を取られる。

初日から難儀だと、弥市は人夫たちの様子を見る。

すでに泥だらけの者もいた。時折、わっと歓声上がるのは、転ぶ者を笑っているのだろう。

八ツ山は、かつて江戸の出入口であった高輪大木戸から品川宿へ向かう東海道に沿って立っている小高い山だ。ここに登ると、品川の町並みと、高輪の海が見渡せるので、錦絵などにも描かれた江戸名所のひとつでもあった。

しかし、八ツ山から南、少し内陸に入った御殿山とともに、品川台場工事の際、切り崩され、こんもりと樹木の茂った山の面影はほ

ぼなくなっている。

数年前に、鉄路敷設の前段階として弥市と久治郎によって八ツ山はさらに切り割りされており、山肌が露出し、土を掘り下げた大きなくぼみもある。案の定、そこには雨水がたっぷり溜まっていた。

三人は、山を登り、仕事の様子を見て回る。

手代の常吉が声を張って、常雇いの者たちに指示をしている。

あいつも、うまく差配が出来るようになった、と、弥市はその姿を、眼を細めて眺める。

自ら鍬を持ち、ひときわ大声を上げているのは森田屋の婿だった。

息子ももっこを担いでいる。

「藤助さんとこのふたりもよく動いているね」

「鉄路を敷くといったら、眼を輝かせやがった。けどまあ、まだまだ甘えよ。もっこ担ぎなんざ、見ていられねえ。よろよろしていやがる。腰が入ってねえよ。おれの元の生業は左官だが、息子はまったく興味を示さねえ。婿はもともと左官だったから、そっちに期待しているよ」

森田屋は嬉しそうにふたりを眼で追っていた。

黒鍬たちは、中腹あたりで作業をしていた。鋤簾を使い土を掬い、まんう鍬で土を掻き出し、土に混じっている石を取り除く。慣れた手つきでもっこへ土を移し、すぐさまもっこ担ぎが麓に運んで行

く。えっほえっほと軽やかな声がする。掘り出した土は俵に詰め、積み上げて行く。

黒鍬たちの動きにはまったく無駄がない。仕事が早い。雨を含んだ土は重いだろうに、他の人夫たちの倍の量をもつこに積んでいるのもたいしたものだ。

けれど、弥市の雇い人の中にも黒鍬に負けない働きをする者がいる。薩州屋敷の出入りになってからこつち、ずっと弥市の請負仕事に携わっている甚助という五十過ぎの親爺だ。

おお、といきなり声が上がった。

弥市は笑みを浮かべる。甚助が半纏を脱ぐと、誰もが眼を奪われてしまう。引き締まったその身体には肩から腕、背から太腿まで、彫り物が施されているからだ。雲の隙間から現れる竜頭観音だ。

いつだったか、薩州屋敷の修繕の折、彫り物を褒めると、若気の至りで、と言葉少なに甚助がいった。天候を自在に操り、恵の雨をもたらし、大地を豊かにするという利益がある竜頭観音を彫ったのは、晴れや雨で仕事が左右される土工人夫だからかもしれない。

それが証拠に、弥市の雇い人たちは、甚助の彫り物に手を合わせ、て、「明日は雨にしてくれ」「晴れにしてくれ」と、しよつちゆう拝んでいた。

今日の快晴はきつと甚助の観音のおかげだ。

高輪の海に眼を向ける。

浚渫に取り掛かれるのはいつになるか。

「すまねえ、旦那方」

黒鯨の源三郎が駆け寄って来た。

「どうだい、土の具合は」と、弥市が訊ねる。

「ああ、いい土丹だねえ。粘りの具合もいい。雨の後にしちや、水もあまり含んでいねえし、石の混ざりも少ねえから掘りやすいよ。それより、重太郎というお人が連れてきた人夫たちなんですけどね、丁張りを越えて掘っているんですが。どうしたもんだか」

久治郎と森田屋も訝る。

「あつちは、続いた雨で土から水が染み出して、ちろちろ流れてい  
たんで丁張りを控えたんですが。下手すりゃあ土砂が滑るかもしれ  
ねえ」

「どのあたりだ？」

久治郎が険しい口調でいう。

「西側の中腹でさ。前に掘られた痕があるんで掘りやすいんでしよ  
うが。ひとりふたりならまだしも、数百が寄ってたかって掘り進め  
たら危ねんじゃねえかなあ。まあ、あのお方が差配だっというから、  
おれからはいえねえし」

重太郎か。弥市は息を吐く。

「ありがとうよ。おれが見にいつてみよう」

久治郎がすぐに走り出した。

この築堤で養父の政次郎に認められたいのか、それともこつちを出し抜きたいのか。どちらでも構わねえが、くだらねえ。競<sup>きそ</sup>つて土を掘ったところで何もなりやしねえのだが。

「じゃ、おれは戻りますんで」と源三郎が身を翻<sup>ひるがえ</sup>した。

と、

「おーい、おーい」

麓から、声が上がってきた。

森田屋が照りつける陽をさけ、手をかざし、下を見ながらあれば、と呟<sup>つぶや</sup>いた。

「弥市さん、井上<sup>いのうえ</sup>さまだよ。もうひとりは、異人のようだね」

弥市は思わず振り返る。確かに井上<sup>まじむ</sup>勝だ。その後ろには、黒い帽子を着け、顎鬚<sup>あごひげ</sup>を蓄<sup>たくわ</sup>えた男がいた。泥濘<sup>ぬかるみ</sup>に足を纏<sup>もつ</sup>れさせながら、こちらに向かって駆け上がってくる。

「ああ、平野屋さんと森田屋さん。ご苦労さまです。雨が永遠に降り続くのではないかと、冷や冷やしていましたが、本日はまさに工

事日和<sup>ひより</sup>だ」

少し息を切らせながら、笑った。

「どうなさいました。このようなところまで」

弥市の質問には答えず、井上は後ろに立つ背丈のある異人に前に出るよう促した。

「鉄道技師のモレルさんだ。ミスター・モレル。こちらが、平野屋弥市さん、森田屋藤助さんです」

モレルは、「オー」と感嘆して、手を差し出してきた。そうだ、異人たちは手を握って挨拶していた。妙な習慣だと笑っていたが、弥市は差し出されたモレルの手を握った。森田屋も弥市に倣って、モレルの手を取って、頭を下げた。

弥市は自分の掌の感触を思い返した。モレルの手は分厚くて、固かった。掌にはたこがあった。きっと、以前井上がいっていたしやべるといふものを握っていたのかもしれない。このお人もまた自ら普請場に出て行く、井上のような者なのだろう。

肌が白く、顔の造作も日本人とはまるで違うせいか、異人の歳など見当がつかない。立派な鬚を蓄えているので老けても見えるが、その実、井上とさほど変わらないのかもしれない。

「井上サン、弥市サンのコト、ヨク話シマス」

「え、ああ、それは」

弥市はしどろもどろになる。異人が日の本の言葉を喋ったのに仰天した。

森田屋も眼を白黒させている。

「あはは、モレルさんには確かに平野屋さんのことをよく話していたからねえ。そう、ずいどう隧道のこともモレルさんに伝えた」

「まことに？」

「その手があったかと、モレルさんも驚いていたよ。これを土産みやげに沿岸の漁師りょうしたちに話が出来る。そうだそうだ。築堤の絵図面が完成したから、矢も盾もたまらず馬を飛ばして来たんだ。とはいえ、モレルさんは高輪が住まいだから、そこから歩いて来たがね」

お雇い外国人は、モレルの他十九名が来日し、高輪大木戸からほど近い長心寺ちやうおんじを住居としていた。かつて阿蘭陀オランダ公使館だった寺院だ。モレルは鉄道技師として、政府に雇われた異人の中でも、中心的な役割を担い、伊藤博文ひろぶみ、大隈重信おおくましのぶにも鉄道について様々な助言をしている。

絵図面が出来たと聞いて、弥市は色めき立った。

そのとき、叫び声と悲鳴が響き渡った。

弥市と森田屋は振り返る。

「西側で将棋倒しょうぎした。滑って落ちた」と、人夫が走って来た。

井上とモレルが顔を見合わせる。

やっちまったか。

「皆、西側へ行け。助けるぞ」

弥市が声を張ると、人夫たちが動いた。

高輪の料理屋の二階で重太郎が頭を下げた。

「申し訳ねえ。年寄りの人夫が斜面の泥濘ですつ転んで落ちやがって、他の奴らも巻き込みました」

幸い命を落とした者はなく、滑落かっらくした数十人のうち、鍬や鋤に当たり十数人が怪我けがを負い、滑り落ちた者の下敷きになって数人が胸や足の骨を折った。

大事故とはいわぬまでも、怪我をした者はしばらく現場に出られなくなる。

井上とモレルが険けわしい顔をしていた。

弥市は帽子を取ったモレルが禿頭はげあたまだったので思わずまじまじ見てしまったが、それより、膝を立てて座っているのに驚いた。井上が気にも留とめていないところを見ると、普段からこうした座り方をしているのだろうと思った。

「相模屋。あそこは丁張りの外だ。黒鍬たちが土の様子を見て決めたところを、お前は無視したのだぞ。仕事初日から差配が人夫を危険いひに晒ひしてどうするのだ」

大竹の厳しい声が飛んだ。



「うちの手代が命じたことでき。おれはよせといたんですが。平野屋や安達屋の人夫たちが土の量であおるもので、手代も意地張っちまったんでしよう」

なんだと、と久治郎が身を乗り出したのを、弥市が止めた。

「手代が迷惑をかけたことはお詫びいたします。たかが泥に滑って落ちただけで、人死にも出てねえんだ。まあ、でもこれからは、差配として気をつけませ。年寄りの人夫には飯の世話をさせるようにいたします」

重太郎はそういつてうなだれた。

うちの手代、年寄りとわざわざ声高こわだかにいう。要するに自分に非がないといたいのだろう。

「怪我をした人夫たちの手間と医薬代は相模屋で負担しろ。我らは関知せぬ」

大竹がいい放つと、俯うつむいていた重太郎から、小さく舌打ちが聞こえた。

弥市が膝を進める。

「大竹さま、初日からご心配をおかけいたしました。雨の後で地面がずいぶん水を含んでおりましたので、誰もが起こしかねない事故だったと思います。今後は、油断せぬよう、私らも心しておきます

ゆえ」

うむ、と大竹が顎を引く。

「まだ先は長いからな、ひとりでも人夫は必要だ。気をつけることだ」

へい、と皆で返答したが、重太郎が上目遣いに弥市を窺っていた。

「よし、まずは飯だ、酒だ。膳のものが冷えちまうぞ」

井上がその場を和ませるように、声を張る。

「森田屋を残しておりますんで、あつしらは、また、八ツ山に戻り  
ます」

早速、銚子を取った井上が、途端につまらなそうな顔をする。

「では私がご相伴を」

大竹が銚子を取った。

「それより、井上さま、絵図面を見せていただけのじゃなかった  
んですかい？」

ぐいと盃を干した井上が、あつとばかりに、丁寧ていねいに折り畳たたまれた紙を洋装の前を開けて取り出した。

「絵図面といっても、仮の物と思って見てくれ」

大奉書だいほうしょほどの大きさの紙に、芝しばから品川の海岸線が描かれ、果たして、堤は海の上にあった。

「おう、これかこれか。海岸線と同じように弧こを描いているな  
久治郎が食い入るように見る。」

「海岸線に沿って曲げて造るより、真まっ直すぐにしたほうが、少しは堤が短くなるじゃありませんかね？」

重太郎がいうと、井上が首を横に振る。

「沿岸に沿わせたほうが、海の深さがある程度一定だ。いくら遠浅といっても、沿岸から離れば深さが変わるだろう。測量掛の出した数値で浅いところを選んでいるんだ」

水深は縄なわの端はしに鉛なまりをつけたものを海に垂たらして測るのだよ、と井上は重太郎に説とくようにいった。

重太郎が、ああ、そうですかい、と唇を曲げる。

「堤いすじから幾筋か延びているこの線は、街道と繋ぐ道ということですかね」

弥市が指差すと、井上が頷いた。

「無事に鉄道が開通しても方が一、築堤や蒸気車に不具合が出たら、すぐに渡れないと困るからね。それに築造するときも必要だろうか？」

ここを土や材木、砂利じやりの置き場に利用することも出来る」

なるほど、と皆が得心とくしんする。頭を突き合わせている様子を、モレルは黙って見ている。

「堤の長さは約二十四町。そして、これが、築堤を縦割りにした図だ。線路を敷く天端てんばは幅約三間半、海底面は十間（約十八メートル）」  
井上は、いちいち図に指を滑らせながら話す。言葉がわからない

モレルに何を説明しているのか伝えるためだ。

重太郎が図を覗き込む。のぞ

「ははあ、なんだこれは？ 片方は斜面があつて、もう片側は真っ直ぐかい？ だから、海の底のほうが長くなるつてわけか」

「傾斜がある側が海側、直立しているのは、陸側だ。護岸でもこの形があるだろう？ 両側とも垂直に壁かべを造るもの、両側ともに斜面をつけるもの。築堤は、その合わせ技わざということだな」

井上は重太郎に眼を向けた。

「それなら、両側とも垂直の壁にしたほうが造るのは楽じゃねえですかい？ なあ、そっちの旦那方、たしか品川の台場の石垣めくを巡らせた側面は、ほぼ垂直だったろう？ 築堤もそうは出来ないもんかね。斜面なんか造るのは面倒めんどうだぜ。なあ、モレルさん」

重太郎がモレルを見る。モレルが訝り、首を捻ひねった。

井上が、重太郎の言葉を伝えると、モレルが、何事か小さく声を洩もらし、肩をすくめた。

と、弥市が先に口を開いた。

「堤に斜面を造るのは、打ち寄せる波を和らげる工夫くふうですよ、重太郎さん」

「そんなのは、わかってらあ。おれがいたいのは、台場は斜面なんか造つてねえつてことだ。台場で出来るなら、この堤でもそうや

ってもいいじゃねえかってことだ。鉄道の開業は再来年だぜ。堤を造るだけじゃねえ、かんじんかなめ肝心要の鉄路を敷くのにとれだけ時がかかるかもわかんねえんだ。おれは、人夫の差配としての責がある。より造りやすく、早く出来るやり方を選びてえんだ」

井上が重太郎を宥めるような柔らかい口調でいう。

「確かにより早く、造りやすいほうがいい。ただ、火砲を置く台場の側面がほぼ垂直なのは、敵が船を接岸出来ないようにするためですよ。それに台場をよじ登ろうとしても、ほぼ垂直では、登り辛い。侵入を阻止することが最大の目的です。城壁と同じだ。けれど、築堤に敵はこないからねえ」

重太郎はそれを聞いて、しふしふ渋々得心する。

「でもね、重太郎さん、台場も見えている部分は垂直ですが、実は、台場を取り囲むように、海底の傾斜に沿って土丹岩が五間（約九メートル）ほど敷き詰められていますよ。さらに、その周りにも石がまばらに置かれています。まあ、後から聞いた話じゃ、海に向かって、いい加減に投げ捨てた人夫もいたそうですがね。ったく酷えもんだ、ははは」

弥市は、おどけていう。

その真偽はどうあれ、波の衝撃を抑えるための工夫が台場では、海中に施されているということだ。

「ほう、そんなことになっていたとは。知りませんでしたよ。もつとも僕は当時十三ぐらいでしたかね。台場竣工しゅんこうの後でしたかねえ、ちようしゅう長州は相州そうしゅうの沿岸警備を命じられて、父とともに、相州上宮田かみみやだ（現神奈川県三浦市）に行っていたかな。上宮田の海がきれいだね、そういえばあのときに伊藤さんと出会ったんだ——ああ、いかん」

思い出話をする場ではありませんね、と井上は照れ笑いをする。

「おい、伊藤というのは、伊藤博文侯のことか？」

大竹が久治郎に小声で訊ねているのが聞こえた。久治郎が頷くと、大竹は眼を丸くした。

「斜面がどうしたって必要だってことは、よおくわかったよ」

重太郎が拗ねたようにいった。

「水の力ってのは、人の想像を遥はるかに超えますからね。川だって、海だって、石を転がし、岩の形を変える。どんなに堅牢けんろうに造っても幾年か経てば綻ほころびがでます。崩れてしまったとき、まさかそんなと感たじるのは、人の驕りですからね。いかに、長く保たもてるか、その工夫は大切です」

ある人が、と弥市は言葉を継ぐ。

「台場は朽くちても誰も文句はいわないが、築堤は違ちがうと。それに、蒸気車は人の命を乗せて走るのだと聞かされて、どうにも感じ入いりちまって。蒸気車は人の暮らしを豊かにするかもしれねえし、国を

富ませるかもしれねえ。でもね、なにより人が安心して楽しめる乗り物にしねえといけねえのかと」

井上が、感極かんきわまったような顔をして、早口でモレルに話しかけた。

モレルがうんうんと頷き、

「平野屋サン、私モ、ワカリマス」

え？ と弥市はモレルの顔を見る。鬚おほに覆くちもとわれた口許に笑みを浮かべながら、モレルが井上に何事かを告げる。皆、異国語などわからぬから、やや高めのモレルの声を黙って聞いていた。相槌あいつちを打っていた井上は、モレルが話し終えると、すぐに口を開いた。

「モレルさんは、日本に来る前、南のある島国で鉄道敷設にかかわっていました。英吉利国イギリスの商人が石炭を運ぶために、敷設しようとしたものです。しかし、働き手の確保が出来ず、清国人しんの苦力や果ては罪人まで集めようかと思うほど苦勞しても、結局、鉄道完成には至らず、とても落胆らくたんしたそうです。造る方も、その国を豊かにしようとか、人々のために造ろうとか、そうした志こころざしを持った人がおらず、ただ、その島から、利益を得ようとしていた。でも、弥市さんのような思いを持っている人がいれば、その国の民たみも鉄道に興味を持つてくれたかもしれないと」

「そりゃあ。かたじけのうございます」

弥市が頭を下げると、モレルもそれを真似た。

なにやら面白いお人だ。

けれど、異人に自分の思いが伝わったのが嬉しかった。姿形は違えども、同じ心を持った人間だと妙なことを考えた。

鉄道掛の武者満歌は、土木技師のお雇い外国人の弟子は怒鳴るし、厳しいといていた。しかし、モレルは違った。威張るようなそぶりもなく、日本人を見下すこともない。誠実で、掌にたこを作ってしまうほど熱心で真面目な男なのだ。このお雇い外国人なら、日の本初の鉄道をしっかりと導いてくれると思った。

「さてさて、では、こちらを見ていただくよう」

と、井上が絵図面を指し示し、横に座るモレルを見る。モレルが笑みを浮かべた。

よくよく見ると、一ヶ所だけわずかだが、線が二重に引かれている。

「まさか」と、弥市が呟いた。

「そう、平野屋さんがいった隧道だ。この下を舟が通る。といつても、モレルさんの提案で、橋を渡すことにしました」

「堤と堤を橋で繋ぐってことですか」

久治郎が眼をしばたたく。

モレルが井上に話しかける。井上はうんと首肯する。

「さすがに築堤に穴を開けるわけにはいかない。それこそ崩れたら、



大事になる」

「しかし一ヶ所では——」

弥市はぼそりと洩らした。二十四町に亘り堤は海の上を通るのだ。漁師や魚屋も納得しないだろう。

と、大竹が口を挟んだ。

「平野屋の言葉に私も感銘を受けたが、それは当然、我らの目指すところでもある。だが、沿岸の漁師たちから文句がなければ、わざわざ橋など架ける必要もありますまい。鉄道は民のためでもあるが、大前提は国家繁栄のため。下々一人ひとりの話など聞いていては、埒があかんのではありませんかな」

大竹はそういいながら眉根を寄せた。

「此度の敷設にあたって、品川の東海寺など、境内を真つ二つに貫くように線路を通すのですぞ」

品川宿にほど近い、権現山の南麓にある東海寺は、徳川三代将軍家光が、沢庵禪師のために建てた寺院で、寺域四万七千六百坪を誇り、多数の塔頭を持っている。いくつかの大名家が墓所としており、鷹狩りの際、将軍が立ち寄ることもしばしばあった。

八ツ山の手前に品川停車場が出来る予定になっており、海上の鉄路は、品川から陸地に入る。権現山を抜け、畑地へと延び、六郷川（多摩川下流）へと向かう。権現山の麓にある東海寺はまさに線路

の通り道になっていた。

「新政府は、天皇をいただく国として神道しんとうを国教として神仏判然令を布告ふこくしたくらいですから。寺など無用とされているのやもしれません。そもそも徳川家が建てた寺など、潰つぶしてしまっても構わないと思っっているでしょう。そのくせ、芝の薩州屋敷には線路を通さんと威張りくさり。薩摩と兵部省のせいで、海に堤を築くことになったのだ。まったく迷惑な連中だ」

苦々しい顔をして大竹が吐き捨てる。元幕臣にとって口惜くちおしいことばかりだろう。

「やや、これは、ご無礼を」

突然、大竹が慌あわて出した。井上が旧長州藩の人間だということを感じ出したのだろう。長州は、薩摩とともに維新たてやくしやの立役者だ。政府のお偉方えらがたでもある。

「いやいや、お気になさらず。件くだんの寺には申し訳ないですが、六郷川までもっとも短い距離を取らざるを得なかったとご理解いただけますとありがたい」

「いや、そのような」

大竹は汗顔かんがんの至りとばかりに首をすくめた。

「大竹さま、さき、どうぞ。酒が入ると思わぬことも口走ってしま  
うものです。あつしなんかも施主せしゆの醜聞しゆうぶんを、うっかり当人の前で話

してしまい、肝きもを冷やしたことが幾度もござりますよ」

久治郎が大竹に盃をとらせて、酒さけを注ぐ。

井上は手酌てじやくで盃を重ね始めた。

「大竹さまのおっしゃったことに、僕も異論はありません。兵部省には困ったものです。横浜から外国人が蒸気車に乗って東京に押し寄せてくるのは危険だの、銃も火砲も異国の物を買ひ、この上、鉄道敷設で英吉利国から金を借り、国力を低下させてどうすると」

酒を次々流し込んだせいにか、井上が饒舌じょうぜつになる。

「今だからいえませんがね、鉄道敷設が廟議決定びやうぎの後、弾正台だんじやうだいが異を唱となえてきた。民が貧しい暮らしをしている、凶作きゆうさくも続いている。まずは民の暮らしを守ることが優先であろうといってきました。しかし、ただの興味や憧れで鉄道を敷くわけではない。国を富ませ、暮らしを豊かにするための鉄道だということがわかつちやいない。それなら、困窮者こんきゆうしやに政府が銭ぜにでも与えるかい？ そんなことしたって一時凌しのぎでしかない。ならばいつ敷くのか？ と問うても、時期尚早しやうそうだというだけだ。理由がない。童わらわが駄々だだをこねているのと同じだ。黒田くろたさんもその口だ」

大竹が、まさか開拓次官の黒田清隆侯きよたかですか？ と驚いた顔をみて訊ねた。

「そうです。横浜など東京からわずか一日で歩いていけるではない

かと頭から湯気を立てていうぐらいだね。その次には、鉄道推進派は、英吉利国に国を売るつもりか、が決まり文句だ。そんな話は聞き飽いた。別の反対理由を聞きたいものだ。そりゃあ、借金はするが、必ず鉄道は利益が出る。もつと長い目で見てほしいんだよ。必ず、誰もが鉄道の恩恵を受けるはずだ。ともかく敷かねば先に進まない」

ふんと、井上は鼻から息を抜き、盃を乱暴に置いた。

「でもね、黒田さんは、来年年明けから、亜米利加と欧州旅行に出る。きつと蒸気車を見るはずだし、乗るかもしれない。そうしたら、蒸気車への偏見へんけんもなくなると僕は思っているんだ。それが楽しみでならない」

わはは、と井上は膝を叩いて笑った。

「けど、大竹さまも蒸気車を走る姿を早く見たいのではありませんか？」

弥市が訊くと、大竹は、盃を手に、まあな、と照れたようにいった。

「ペルリ提督ていとくがお上に献上けんじょうした蒸気車の模型もけいを、作事奉行ぶぎょうさまとともに眼にしたことがあった。こんな物が地を走る亜米利加という国はすごいものだ。それが日本にも敷かれると聞いたときには、身が震えるほど興奮した」

「じゃあ、大竹さんも蒸気車好き仲間だ」

井上は手を伸ばして、大竹の肩を叩いた。大竹が迷惑そうな顔をしたが、井上は気にも留めない。

「井上サン」

井上は、モレルの話に耳を傾ける。

井上がひとつ咳払いせきばらいをして、

「ええと、モレルさんは、今日、多くの人夫の姿を目の当たりまにして、嬉しくなったそうです。汗を流し、懸命に土を掘り出す姿が眩まぶしかったと。政府だけでなく、鉄道にかかわるすべての人が、日本初の鉄道敷設のため尽力じんりょくしている。むろん政府内で強硬な反対派がいることも知っている。説得するには時がかかるかもしれない。でも、悲観することはない。私はこの国に来て、皆さんに会えたことを誇りに思う。私の持てる知識を伝えたい。ともに働き、鉄道の完成をともに見ましよう。そのためにも、皆の気持ちも必ず変わる。ことです。そうすれば、反対していた人々の気持ちも必ず変わる。そう信じましよう」

築堤を走る蒸気車が見たい、きっと美しいだろう、とモレルさんが語ってくれました、と井上が皆を見てから、モレルに顔を向けた。モレルが力強く首肯した。

大竹も久治郎も感極まったような表情をしていた。弥市も同様の顔をしていたろう。思わず拳こぶしを握り締めた。

「皆さん、モレルさんは、老けて見えるが、三十一だよ。若いんだ」  
井上は、モレルの盃になみなみと酒を注ぐ。

ただひとり重太郎だけが冷めた顔つきで、膳の物をつまんでいた。

八ツ山の切り割りが始まって、五日。

弥市は、小屋で森田屋、久治郎と茶をすすっていた。その周りには五十人ほどが寝泊り出来る人夫たち用の小屋がずらりと並んでいる。東京に住まいのある者は、通いで来ているが、そうでない者たちは、ほとんどここで過ごしている。雨風がしのげる程度的小屋掛けた。

「うちの倅せがれが人夫から聞いたんだが、昨夜も一昨日も、喧嘩騒けんかぎがあつたようだね。いびきがうるさいだの、人より場所を多く取っているだの、つまんねえことだ」

森田屋が息を吐く。

「五日でそれじゃあ、先が思いやられるな。一年以上も一緒にいるんだからなあ」

久治郎は煙管きびに刻みを詰めた。

「モレルさんは、皆の気持ちを一緒にしねえと、といったが、どうやればそうなるのか。おれたちが張り切っても、千からの人夫はそれぞれだ。鉄路敷設がどうのというより、銭かせを稼かせぐためだ。なあ、

神奈川台場はどうだったんだい？」

「あれは、松山侯直々の請け負いだったからねえ。お偉いさんが時々視察に来て、人夫に声がけてくれたな、弥市さん」

「ああ、米や酒の振る舞いもあった。そういうのが、人夫の励みになった」

へえ、と久治郎が感心する。と、森田屋が膝を打った。

「ああ、そういや『神奈川砲台』って染めた手拭いを配ったな」

「そうだそうだ。それぞれの持ち場の頭と人夫用に二千本誂えた。あれから、変わったような気がしたな。皆で同じ手拭いを頭に巻いたり、首から下げたりして。この仕事にかかわっているのが誇らしい気分になるといつてくれた奴もいたよ」

弥市は、神奈川台場でともに汗を流した仲間の顔を思い返した。

「手拭いか。なんなら、『高輪築堤』と染めた手拭いを作るかい？」

久治郎が煙を吐き出しながら笑う。

「駄目だ、駄目だ。異国に借金してる政府が銭を出してくれるかよ」

森田屋が、諦め顔で手を振った。

「銭をかけたくねえのなら、鉄道掛のお偉いさんが来てくれりやあ  
こゝ」

「それも難しいだろうなあ、久治郎さん。皆の気晴らしは、湯屋や夕餉どきに高輪周辺に出るくらいだ。あとは、浴びるほどの酒と女

だな」

弥市は笑う。笑いながら、ふと井上のことを思い出した。この閩うんごう十月に工部省こうぶしょうというものが出来たら、井上はそこに移るといふ。鉄道に遠慮なく携われると嬉しそうだった。井上なら、きっと普請場にも来るに違いない。皆と一緒に鍬や鋤を振るうだろう。おそらくその熱情が、人夫たちにも伝播でんぱする。

途方もない築堤を造る。その思いが人夫一人ひとりの胸に刻まれるはずだ。井上に来てくれるよう頼んでみてもいいかもしれない。いや、何もいわずともやって来るだろうと、弥市は心の内で笑う。「さて、外の様子を見てくるか」

久治郎が腰を上げた。

「悪いが、書き物があるんで、先に行つてくれるかい。後から追いかけるよ」

そういう森田屋を小屋に残し、弥市と、久治郎は表に出た。

人夫たちが互いに威勢のいい声を掛け合いながら、土を掘り、土を運ぶ。

一時的に麓に土置場を設けたが、すでに土俵うづたかが堆く積まれ、崩れないよう縄しはで縛り付けてあった。

「早いところ、海に道を造ったほうがいいだろうな。土もそこに移さねえと、こつちに山が出来ちまうよ」



久治郎が冗談まじりにいったが、まことにその通りだ。

「大八車と馬の手配は森田屋さんがしてくれているんだっけな」

「それがなあ」

と、弥市は言葉を濁した。

「なにか、都合が悪いのかい？」

「このあたりの商家がうんといわねえのだそうだ。百姓も同様だ。借りられたら自分たちが困っちゃうってな。ほんとのところ、鉄道敷設に反対しているんだろが、藤助さんは、深川、神田の材木商やら、左官の知り合いに声を掛けて、ようやく百はなんとかかなりそうだと」

「百か。それで回すしかねえのかな。馬に牽かせたほうが楽だが、それも無理か」

久治郎が唇を曲げた。

「それと、築堤に繋がる道だが、高輪南町には海軍の用地がある。士だの石だの海に運んで積み上げたら、けしからんとならねえか心配だな」

「もうそれは、鉄道掛に任せよう、弥市さん。おれたちが恐れながらと出向いたところで門前払いだ」

「そんな程度で済めばいいがな」

「物騒なことはいわねえでくれよ」

久治郎がわざとらしく肩をすくめたのを見て、弥市は笑った。

土俵の近くまで来ると、久治郎が顎を上げた。土俵はすでに一文しちやう  
(約三メートル)ほど積み上げられている。

「ちようど築堤の高さぐらいだなあ。なるほど、こんなふう<sup>に</sup>土を盛るってことか。なあ、こいつは俵のまま、埋めるのかい、弥市さん」

「いや、品川も神奈川の台場でも、俵から出したよ。湿地しつちや護岸の埋め立てじゃねえからな、土だけで締め固める」

「しかし、御殿山を切り通すのは、大仕事だな。どのくらい時がかかるかもわからねえ。人夫も今の倍は必要だな」

久治郎が、眉をひそめた。

「そういや、久治郎さんが前にいったらう。山ひとつがなくなっちまうってな。それが本当になりそうだ」

「違ちがえねえ」

と、

「おい、お前ら、気をつけるよ」

久治郎が上を見上げ、土俵の山に向かって声を掛ける。

弥市も顎を上げると、山のとっぺんに頬被りほおかむをした男がふたりいた。新たな土俵を積んでいるように見えた。

「危ねえ、旦那！」

鋭い声が飛んできたと同時に、甚助がすつ飛んでくるや、久治郎と弥市を突き飛ばした。その刹那、ふたりが立っていたあたりに、土俵がどさどさと鈍い音を立てて落ちてきた。

弥市は地面に突っ伏したまま振り返り、その光景を見た。どっと汗が噴き出す。倒れた足許に土俵がふたつ、破れて土を撒き散らしていた。当たっていたら、ただではすまない。

あたりにいた者たちが、慌てて駆け寄ってくる。

「旦那方、大丈夫ですかい！」

「何があつたんで？」

弥市と、久治郎は皆に助け起こされた。

甚助が上に向かって、叫んだ。

「降りて来やがれ！」

が、顔すら覗かせない。

甚助が土俵の上をひよいひよい登って行く。

「逃げやがった。とっ捕まえてきます」

上から滑るように降りながら甚助がいう。集まって来た者たちも身を翻そうとした。

「いや、待て」

弥市が首を横に振る。

「ともかく甚助さん、助かったぜ」

久治郎が半纏の土を払う。

「どこのモンですかね」と、甚助が太い眉をひそめた。

「いや、頬被りしていたしな、顔はよく見えなかったが」

「うちと、弥市さんと藤助さんのところの人夫なら、こっちの顔を知っているから、すぐに詫びるはずだ」

「だとしたら、差配の相模屋さんの人夫ですかい？ 初日にしくじっているからね、またぞろ騒動を起こしたとあっちゃや、まずいと思っただけでしょうかね」

「そうだな、と弥市は呟き、顔を上げた。人夫たちが心配そうに弥市と久治郎を取り囲んでいる。

「甚助、皆も、大事にするな。こりや、ちよつとした手違いだ」

「さ、仕事に戻ってくれ」

久治郎が声を張った。

とっさに手違いといったものの、この場にそぐわない言葉であると感じていた。弥市の中に一抹の不安が生まれる。

なぜか、初日、泥濘で転んだ年寄りの人夫のことが気にかかった。

丁張りを越えて、土を掘ったことを重太郎が誰のせいしようが構うことはない。

ただ、黒鍬の源三郎は確かにあの場所は危ないといっていた。

起こるべくして起こった事故ということを誰も疑わなかった。そ

こが引つかかる。

土俵もそうだ。起こりそんなことが起きた。

いやな予感は、的中した。

翌朝、麓で百人ほどの人夫が集まって、なにやら揉めて<sup>も</sup>いるのが見えた。

中心に居るのは、常吉だ。人夫たちを懸命に説得しているようだ。

麓には、仮設した<sup>かわや</sup>厠がある。桶を半分がた埋めて、周りを葦簣<sup>よしず</sup>で囲い、中は板で区切っただけの簡易なものだ。大勢が使う厠だ。数十並べていても、あつという間に溜まってしまふ。桶がいっぱいになれば、近隣の百姓家に売る。数があるので、そこそこの銭になる。そうした利益は、人夫たちの飯代に回す。

もつとも、厠など使わずに、そのあたりで用を足す者も多くいる。山を降りて厠まで来るのが面倒だというのもある。

人夫たちはその厠の前で、文句を垂れている。桶が溢<sup>あふ</sup>れて、使えないとでもいつているのだろうか。

「なあ、弥市さん、なんか臭<sup>にお</sup>わねえか？」

森田屋が鼻をすんすんさせる。

「厠があるんだ、しかたねえだろう」

久治郎が、笑った。

近づくと、臭<sup>しゅうき</sup>気があたりに漂<sup>ただよ</sup>っている。

「おいおい、どうしたことだ。ひでえ臭いだ」

森田屋が顔をしかめる。

夏の盛りならば、厠のあたりはかなり臭う。が、これはそれも超えている。

「なんでえ、人夫どもは仕事もしねえで何をやってるんだ。皆さんもうち揃ってどうしましたかね。厠の順番待っているんですかい？」

重太郎が軽口をいいながら、手代とともに歩いて来たが、うつと呻いて、鼻をつまんだ。

「なんだ？ 桶をひっくり返したのか？」

頓狂な声を上げた。

厠を覗くと数十あるすべての桶が地面から抜き取られ、倒されて

いる。あたりは糞尿まみれだった。

「誰の仕業だ、舐めた真似をしやがって！ 皆を集めろ」

重太郎が顔に血を上らせて、吼えた。

「この仕事に気が食わねえ奴がいる。差配のおれが炙り出してやるからな」

だが、名乗り出て来る者がいるはずもなく、糞尿を含んだ土を埋めて、別な場所に厠を移すことになった。

小屋でも重太郎は苛々と爪を噛んでいた。

相模屋の手代が、茶を淹れたが、「気の利かねえ奴だな。酒でも持

つて来やがれ」と、茶を浴びせた。

「気を鎮めたらどうです、重太郎さん」

久治郎がいった。

森田屋は、相模屋の手代に手拭いを渡し、表に出るよう促した。

「重太郎さん、初日に転んだ年寄りのことですが」

弥市が訊ねると、ああ、と重太郎は齒を剥いた。

「なんだよ。足をくじいたっていうからよ、もうここには来てねえ

よ。家で養生してるんじゃないか。銭も渡したからよ」

そう吐き捨てた。

「ちよいと、気になりましたね。常雇いの者ですかね？」

「いや、このために雇った者だよ。それがどうかしたかよ。まった

く役に立たねえ、爺だった」

重太郎はそれだけいうと、ふいと横を向いた。

「親父にこんなことが知れたら」

ぼそりと呟いたのを、弥市は聞いた。

表に出て、相模屋の手代に、年寄りの住まいを訊ねた。

三

重太郎は、相模屋の奉公人を八ツ山に向かわせて、夜の間、見廻

りをさせた。

それが功を奏したのかどうか、無事に二日が過ぎた。

安堵あんどしたのも、束の間つかまだ。今度は高輪の湯屋や飯屋が人夫の出入りを拒こばんだのだ。血の気けの多い者たちが飯屋で暴あばれて、騒さわぎになった。巡査じゆんさに捕まり、山中政次郎が人足にんそくを引き取りに出た。鉄道掛の副総理である平井の口利くちききもあつて、すぐさま解き放ちとなったが、弥市や森田屋の常雇いも含まれていた。

飯屋へは詫わび料を払った。

人夫たちには非がない、と弥市は思っていた。むろん、店で暴れたのは言語道断だが、おそらく鉄道反対の思いがこうした形となつて表れたのだ。

件の年寄りの人夫も、教えられた長屋にはいなかった。別の者が住んでいたのだ。縁者でもないという。

そのことを相模屋の手代に伝えると、「すぐに大旦那に伝えます」と、青ざめた。

土俵を落としたふたりも、人夫として紛まぎれ込んだ者たちだったのかもしれない。

厠の桶をひっくり返したのが、同じ者ではなかったとしても、まったく繋がらないといえない。

雨が降り、休みとなった。



宇田川町の店に相模屋から使いが来た。すぐに来るようにという呼び出した。

娘のお仲なかに駕籠かごを呼ばせて、相模屋に急いだ。

座敷に通されると、久治郎、森田屋はもちろん、他の請負人が十名ほど集まっていた。

上座には政次郎と重太郎、そして鉄道掛であろう羽織袴姿はかまの初めて見る顔が座っていた。

「すいやせん、遅くなりました」

政次郎が、座敷に入って来た弥市をじろりと睨め付けてきた。弥市は、森田屋の隣に腰を下ろし、小声で訊ねた。

「例の話かね？」

「わからねえよ。まだ相模屋さんは何も話してねえ」

久治郎も顔を強張こわばらせていた。

政次郎が、唇を歪ゆがめ、話し出した。

「呼び出してすまねえ。堤の築造と線路を敷く方々に今日は来てもらったが、当面の間、仕事は取りやめとなった」

皆がざわめく。

「いったい何があったんで？」と、前列にいた者が声を上げた。

「鉄道掛の副総理からの御達おたつしだ。これから話す」

「鉄道はおじちゃんになるってことはねえでしょう？」

「当面の間、と今、親父がいったじゃねえか！」

重太郎がきつい物言ものいいをした。年寄りの人夫のことを聞かされたに違いない。かなり苛立いらだっている。

「血い上らせてんじゃねえ、おめえは黙ってる」

養父親ちちおやの政次郎いつかつに一喝され、重太郎は押し黙る。

「八ツ山の切り割りで不始末が続いている。初日に事故が起き、土俵が落ち、糞が撒かれて、人夫たちは湯屋にも飯屋にも満足に行けねえという有様だ。先だつては、それが元で暴れて、巡査やっかいの厄介にもなった」

けど、それは、と久治郎が声を上げた。

「人足たちのせいじゃありません」

「いいから、黙って聞け」

政次郎が宥めるようにいって、隣にいる者に頭を下げた。

「鉄道掛おのともごろうの小野友五郎と申します。鉄道敷設へ向けて、皆さまには様々力添えいただいていること、まずは礼を申し上げます」

小野という鉄道掛はよく通る声で、丁寧にはきはきと話した。

「先ほど、どなたかがいわれたように、人夫たちに非はありません。あるとすれば、それは此度の鉄道敷設事業であります」

おいおい、何を言い出すのか、と弥市は眼をしばたいた。

「この一連の騒ぎは、鉄道敷設に反対する町人、百姓らが起こした

ことです。私は測量を行っておりますが、御殿山の南の測量のために打った杭がすべて抜き取られておりました。それがこの地の百姓たちの仕業であることが判明いたしました」

とんでもねえ、と誰かが呟いた。

「政府は、用地買収を進めておりました。すでに金子きんすの用意もし、よりあい寄合を重ね、説得に努めて参りましたが、百姓家では、先祖代々の土地は売れないと立き退きを拒みつづけ、芝も高輪も街道筋の表店おもてだなのほとんどが反対しています。つまり、鉄道が通れば、人が通らなくなり、商売が立ち行かなくなるというわけです。八ツ山山麓の数軒の町家ですら、他所よその土地に行けば暮らしが変わってしまうと聞く耳を持たない」

小野はそこで言葉を一旦切って、茶をぐくりと飲んだ。

「むろん、このような反発は鉄道敷設が町人らに伝わった時点で予想しておりましたし、耳にしていたことです。が、いまだ話がついていない状況であるのに、八ツ山の切り割りが始まった。政府が民を無視したと思ってしまったわけです。それがこうした形になって表れた」

「そんな奴らは、巡査に引き渡せばいい」

重太郎が吐き捨てた。

小野が薄ら笑いを浮かべた。

「もちろん、それが一番の解決ではありませんが、鉄道反対の波は、芝、高輪、そして品川に広がっている。多少の怪我で済めばいいが、これが徒党を組み、打ち壊しのようなことにならないとも限らない」

「ですが、切り割りを一時、取りやめにしたところで、また普請が始まれば、それこそ騙だまされたという不信感をさらに募つらせることになる。おためごかしだ。今は、幸い大した被害はありませんが、御殿山の切り通し、それこそ、築堤さなかを造っている最中に崩されることもあるかもしれません」

久治郎が厳しい声を出した。

「その通り」

小野が強く言い放つ。

「鉄道敷設は、もはや我が国の悲願になりつつある。とはいえ、いまだに反対する方々が政府内にもいらつしやるのには閉口へいこうしていただけますがね。実は、此度の取りやめの一番の理由は、東海道沿いの町人や高輪の百姓ではない」

皆が、戸惑あやまう。

「高輪南町みなみちように海軍の用地があり、そこが下げ渡しを強硬に拒んで  
いるためです」

案の定だ。久治郎が弥市を窺めくってきた。互いに目配めくせする。

土を移さなくてよかった、と胸を撫で下ろした。

「我々は幾度となく説得を試みておりますが、兵部省はのらくら逃げ回っているという、まったくもって卑怯な態度を取り続けているのです。これは、あくまでも、政府と鉄道掛の力不足。兵部省を筆頭に、民衆も含め、一刻も早く工事が再開出来るよう、我らは全力で説得に走ります」

その期間をどうか申し受けたい、と小野は頭を下げた。

「悔しくてならねえ。ようやく切り割りが始まったっていうのに、取りやめだときた。これで築堤の完成が遅れたら、誰のせいになるんだろうな」

相模屋からの帰り道を三人で歩きながら、久治郎がいった。

笠にあたる雨が強くなる。

「しかし、反対がこんなひどいとは、思わなかったな。政府も鉄道掛ももっと楽に進められると思っていたのだろう。金を渡せば、かたがつくと。それにしても兵部省には呆れるな。政府内も足並みが揃わないのじゃ、敷設出来るのか不安になる」

そういつて嘆息する森田屋を横目で見つつ、弥市はいった。

「実はな、ちよつと前に、勝さまが訪ねて来たんだ」

は？ と久治郎が声を上げた。

「神奈川台場は勝さまが絵図面を引いたから、その縁だよ。それに、蒸気車を教えてくれたのも、あのお人でね」

久治郎が得心したように大きく首を縦に振る。

「その時、いわれたんだ。弱い者をいじめたら駄目だってな。人には感情つてものがある。無理を通せば、ますます意固地になると」  
「おれも、金渡すから今すぐ出て行けといわれたら、待つてくれというだろうなあ。育った土地に愛着がある」

久治郎がしんみりした。

「だから、先祖代々の土地を売りたいくねえって気持ちには、その家の者しかわからねえよ。銭金じゃねえ、思いがある。それに、鉄路を通すから売らなきゃいけねえ百姓と、免れた百姓まぬかもいる。それも複雑だ。不平が出るのも頷ける。金だけで、代替え地が与えられなかったら、百姓はおまんまの食い上げだ。生業なりわいだつて変えることになるかもしれねえ」

どうしたもんかな、と弥市は空を見る。どんよりと雲が垂れ込め、針のような雨が顔に突き刺さる。

「井上さまが漁師たちを説得するのに、同道することになっただろう？ あの話はどうなったのかね。すぐにでも行こうって感じだったが、報しりせはないのかい？」

森田屋が、訊ねてきた。

「ないな。多分八ツ山の切り取りやめも聞き及んでいると思うが。直じかに、おれたちに迷惑をかけるとは思っていなかったのかもしれない。政府と鉄道掛が動くといっている手前、井上さまも様子を  
見ているんだろう」

築堤を造るよりも人の心のほうが難儀ではないかと、ついつい思  
った。

「けどな、反対の者たちを説得するのはいいが、こっちは人夫の賃  
金をどうするかだよ。二年近くかかる普請だ。それを見越して、来  
た者も大勢いる」

森田屋が大きく息を吐く。

「他の仕事があれば、遠慮なく移してもらうしかないな」

弥市も途方に暮れていた。ただ、再開を待つことしか出来ないこ  
とにも焦じれる。

「横浜のほうは進んでいるんだろうな。だったら、人夫をそちらに  
回せねえかな。あっちも、神奈川台を切り通して、鉄路を敷くんだ  
ろう?」

久治郎が、肩をすくめる。夏なのに冷たい雨だ。

「あっちは、梅田組うめだぐみがある。品川台場にかかわった請負人が入って  
いるから、人は足りているんじゃないか。横浜の築堤を請け負った  
嘉右衛門かえもんさんからも何もいってこねえしな」

「そうか」

と、弥市の答えに久治郎が消沈する。

「むしろ、御殿山の切り通しに梅田組がほしくらいだよ。こつちでも二千は集められる。が、本当なら六月一杯で土と砂利を六割ほどは集めるはずだったんだ。けど、今切り割りを止められて、数ヶ月も待たされたら、御殿山の切り通しは短い期間でやらなきゃいけなくなる。それを取り戻すためには、人が要る」

「梅田組の半之助はんのすけさんは、薩摩出入りだったんだ。弥市さんとは顔なじみだろうか？ 話をつけるのもたわいもねえ」

「そうだな。話をしてみるか」

いや、それはやめたほうがいいよ、と森田屋が割って入ってきた。

「弥市さんが出て行ったら、差配としての重太郎さんの立場がなくなる。それでなくても、親父さんには頭が上がらなそうだしな。こは重太郎さんの顔を立てるべきだよ」

「また、苛々と爪を噛まれるのも嫌だしな」

久治郎が肩を揺らした。

「藤助さんのいう通りだ。若い者に任せよう」

「いきなり、隠居みたいな口を利いてるねえ」

「おいおい、隠居をすっかり決めてた、あんたにいわれたかねえよ」

弥市は森田屋をからかうようにいった。



三人が同時に嘖き出した。

雨から逃げるように走ってきた商家の奉公人がすれ違いざま、大声で笑う三人を驚いた顔で見ながら、通り抜けて行った。

蕎麦屋そばやに入って、腹を満たし、弥市はふたりと別れ、駕籠に乗った。

揺られながら、横浜へ行こうと思いついた。

高島屋嘉右衛門に会うためだ。

横浜築堤の絵図面があるのなら、見てみたい。それから、見積もりも知りたいたい。

取りやめだからと腐くさっている場合じゃねえ。先だ。先を見てなきやいけねえ。

よしつ、と弥市は腹に力を込めた。

翌日、まだ雨が残っていたが、弥市は横浜へと向かった。

八ツ山のこととは、常吉に任せれば大丈夫だ。

久しぶりの横浜だ。

東海道を歩きながら、海を眺める。空を映しているのか、海上は灰色をしていた。白い波頭なみがしらがちらちらと見えた。

約一丈の高さの築堤がここに来るのだ。弥市は自分でも驚くぐらい早足になった。

さて、嘉右衛門への手土産はどうするか。鶴見つるみの米饅頭よねまんじゅうもいい。久しぶりに、おれが食いたい。

嘉右衛門が請け負った築堤を含む埋め立て地の高さは一丈二尺余、幅三十五間（約六十四メートル）、総面積約十一万五千坪。

肝心の築堤は、長さ七百七十間（約一・四キロメートル）だった。

見積もりは、松の丸太、割栗石わりぐりいし、人夫などの賃金を含め、約十七万六千両となっていた。

弥市は、控えを見ながら唸うなった。ここには石垣や海底に用いる石が含まれていない。それは、政府が支払うということか。

築堤以外の埋め立ても含んでいるので、この見積もりを手本には出来ないが、高輪は横浜よりも長いことを考えるとどうだろうか。

高輪築堤の見積もりは、この二倍を若干切じやつかんるぐらいになるか。

弥市は、和洋折衷せつちゆうの旅館「高島屋」に案内され、何やら、座り心地のよい長椅子ながいすに座らされた。

眼の前には、赤い色をした飲み物が置かれた。

座敷に並んだ調度品の豪華さに眼を奪われた。人が入れそうな大

きさの清国の壺つぼや、軸物じくもの、獣けものの剥製はくせいなど、驚くものだらけだ。

机はなを挟んで座る嘉右衛門が、上機嫌じようきげんでいった。

「異国の酒だよ。横浜はこういう異国の物が手に入るから便利だ。

東京じゃ、こうはいかない。だけど、鉄道が敷かれたら、異国の品が東京にたくさん流れるんだろうなあ。まあ、それで、新しい商売が出来るかもしれない。弥市さんも乗らないか？」

「はは、と弥市は空笑いする。」

相変わらず話し好きで、熱がある。低くなく高くなく、いい塩梅あんばいの声音こゑが心地いいせいかな、つい話に引き込まれる。伝馬町の牢屋敷てんまちょう ろうやしきに入っていた頃、牢名主なぬしに気に入られたというのも領ける。

「それにしても雨の日に訪ねてくれてよかった。おれはね、晴天百四十日という約定やくじょうで請け負ったのさ。一日でも遅れたら、おれに下げ渡すといった埋め立て地を取り上げられちまうのさ。まったく、伊藤さまもひどいお人だよ」

「伊藤博文侯か？」

「ああ、大隈さまと、ここによく来てくれてね。聞かれちゃ困るよ。うな話をしていたのさ。そのとき、鉄道の話が出たんで、おれが手を挙げた」

なるほど、嘉右衛門らしい請け負い方だと呆れながらも、感心した。

「けど、あんたも築堤造ってる最中じゃねえのか？ いいのかい？ ああ、雨だから休みか」

そうじゃないんだ、と弥市は置かれている状況を話した。

「そいつは難しいなあ。横浜は、人家が少なく、埋め立てる手間のほうが多いから、文句は出ねえが。そりゃあ、町人中、畑中通すには、不満が出るのも当然だな」

嘉右衛門が唸る。

「人夫は、千は無理だが、神奈川台の切り通しを手伝ってもらうことは出来るな。それから黒鍬に来てもらえるところちも助かる。人夫の数が増えたと、見積もりを直せばいいことだ。鉄道掛に文句をいわれたら、伊藤さまにいつけてやると騒いでやる」

嘉右衛門は破顔した。

「ありがてえ、恩に着るよ」

弥市が礼をいうと、嘉右衛門がぽんと手を打った。

「そうだ。おれが、せんだん占断が得意なのは知ってるだろう？」

「ああ」

占断で牢名主が嘉右衛門を信用したということを目にしたことがあった。

嘉右衛門が、急に声をひそめる。

「政府のお役人も、おれの占断を聞きにくるんだよ。まあ、おれこういう通りに事を進めてうまくやってる奴もいるようだがね」

と、くすくす笑う。

「おれはいいよ。嘉右衛門さんを信用してないわけじゃないが、

多分聞いたところで、すぐ忘れちまうかもしれねえし」

弥市がいうと、

「それでいいと思うよ。占断はひとつの導きであって、そうしなければならぬとか、未来を約束するとかいうものじゃない。でも、きつと大丈夫だ。予定通り冬の初めには築堤に取り掛かれるんじゃないかねえのかな」

嘉右衛門が自信たっぷりにいった。

おれの顔色を見て、何か読んだのかと背筋が寒せすじくなった。

嘉右衛門のところへ、三日過ぎた。神奈川台の切り通し、築堤の埋め立てなどを見て回り、東京へ戻った。

お蝶のところでのんびりしていると、森田屋が飛んで来た。

「やっと戻ったかい。井上さまの首が伸びちまうところだったよ。芝、高輪の町人から鉄道敷設反対願いが出されるって噂だ。井上さまがそれを知って、鉄道掛よりも先に町人らと寄合を開こうといっている」

願いが出されるということは、反対する町人たちの意見をまとめる奴がいるのだ。総代がいれば、説得もしやすい。

井上はこの動きを待っていたのか？ まさかな。嘉右衛門じゃあるまいし。

弥市はすぐさま森田屋とともに、築地の鉄道掛の役所へ急いだ。  
皆の気持ちを一緒に。モレルの言葉が脳裏のうりに浮かび上がってきた。

(つづく)